

# 巻頭言

樋口一葉と

『桂園一枝』と一枚の封筒



総合科学研究科副研究科長  
樋原 修先生

私の研究室にある『桂園一枝』という本と、その中に挟まれていた封筒の話をしたのだが、そのためにはまず、樋口一葉のことから始めなければならぬ。

樋口一葉は現在の五千円札の肖像画になっている人だから、「たけくらべ」や「にぎりえ」などの名作を書いた明治の閨秀作家であることを知らない人は

いないだろうが、その他にはどのようなことをご存じであろうか。たとえば、貧困のうちで制作しながら天折した薄幸の女性といったイメージも広く流布していると思われるが、実際には彼女の短い生涯にはかなりの起伏があったのであり、生涯を通して貧しかったわけでもないのである。

一葉は明治五年に、東京府の内幸町にあった東京府庁構内長屋の官舎で生まれている。父則義は甲斐国（現在の山梨県）の農家の出で、安政四年に妻とともに江戸へ出て働き、のちに御家人株を買って八丁堀同心となった人である。江戸の身分制度からすると、百姓から武士への身分移動は困難だと思われるが、ちだが、この時期になると、このような株の売買による移動は、かなり行われていたようである。則義は刻苦して武士の身分を手に入れたわけだが、彼の努力を呑み込んでしまうような大きな時代変動がまもなく起こる。江戸幕府の瓦解である。則

義は新政府に仕え、東京府庁に勤めたため、一葉はその官舎で誕生したのである。則義は、のちには勤めのかたわら金融や土地売買にも関係しており、一葉少女期の樋口家の生活は「中産階級の暮らし」であったと和田芳恵氏は述べている（『日本近代文学大事典』）。

一葉は、数えの十二歳で青海学校小学高等科第四級を首席で修了した後、家事見習いのため中途退学しているが、これも、当時の慣習に従ったものと見ておくべきだろう。一葉の学校教育はこれで終わったが、特筆すべきは、明治十九年八月から、中島歌子の歌塾萩の舎に通い始めたことである。当時、和歌は上流の子女にとって必須の教養とされており、事実萩の舎には梨本宮妃や鍋島、前田侯夫人なども通っていた。この塾で一葉は、華やかに着飾った上流の人々に立ち混じって肩身の狭い思いもしたが（そうした時に彼女を支えたのは「士族の娘」の自恃であったというが、

悲しいことに、それも父が金銭で買った、いわば上げ底のものであった）、最初の文学的教養を得たのである。

この中島歌子は、桂園派の歌人であった。桂園派は香川景樹（桂園）から始まる歌の流派で、この当時の宮内省御歌所もこの派の歌人によって占められており、歌壇を支配していると見られていたから、与謝野鉄幹や正岡子規が和歌の革新運動を起こした時、主として攻撃対象となったのは彼らだったのである。

ようやく『桂園一枝』について語れる所まで来た。『桂園一枝』は香川景樹の歌集であるが、右に述べたような次第で、文学史的にも興味深い本であるため、私は何年前かにそれを購入した。木版五冊本で、五万円ほどであったと記憶するが、この中に、最初に述べた一枚の封筒があったのである。残念ながら中身は失われていたが、宛名には「男爵夫人岩崎寧子殿」と記されてあった。もちろん、封

筒が挟まれていたからといって、即座にこの人をこの本の旧蔵者とは断定できないわけだが、「岩崎」というとあの「岩崎」ではないかと興味を引かれた私は、この人のことを調べてみることにした。すると、果たしてこの人は、三菱財閥の創業者岩崎弥太郎の長男久弥の夫人であることが判明した。江戸末期の若年寄を勤めた上総飯野藩主保科正益の長女で、「寧子」は、「やすこ」ではなく「しずこ」と読むらしい。久弥は一八九三年に男爵に叙せられているから、まず間違いないということになる。たしかにこの人はこの本の旧蔵者にふさわしい人であったわけである。

これを調べる過程で、私はさらに面白い事実にぶつかった。岩崎弥太郎の父弥次郎が、土佐藩の地下浪人であったという事実である。地下浪人とは、郷土株を売って浪人となった人（およびその子孫）のことである。郷土の詳しい説明は避けるが、広い意味の武士であるから、こ

れは樋口則義とは逆の立場であったことになる。明治を迎えて岩崎家は大変な成功を収めるが、それと対照的に晩年の則義は事業に失敗してしまい、多額の負債を家督相続人であった一葉に残したまま死去するのである。

このように、この本の上で幾人もの人の運命が交錯する様を私は見ることができた。これを書物というものの徳と見るかどうかはともかく、多少の好奇心を満たし得た私はいささかの満足を感じたのであった。